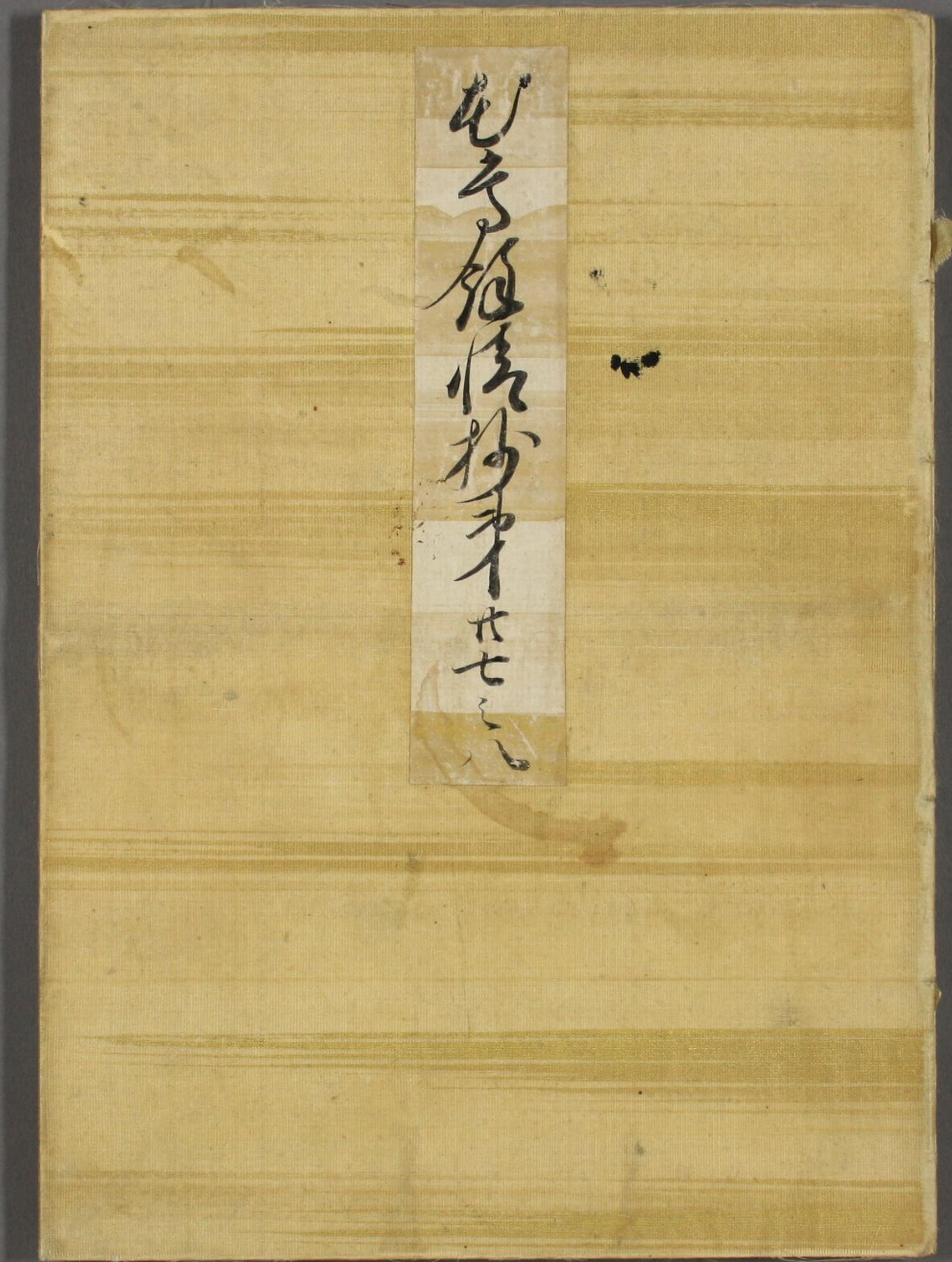
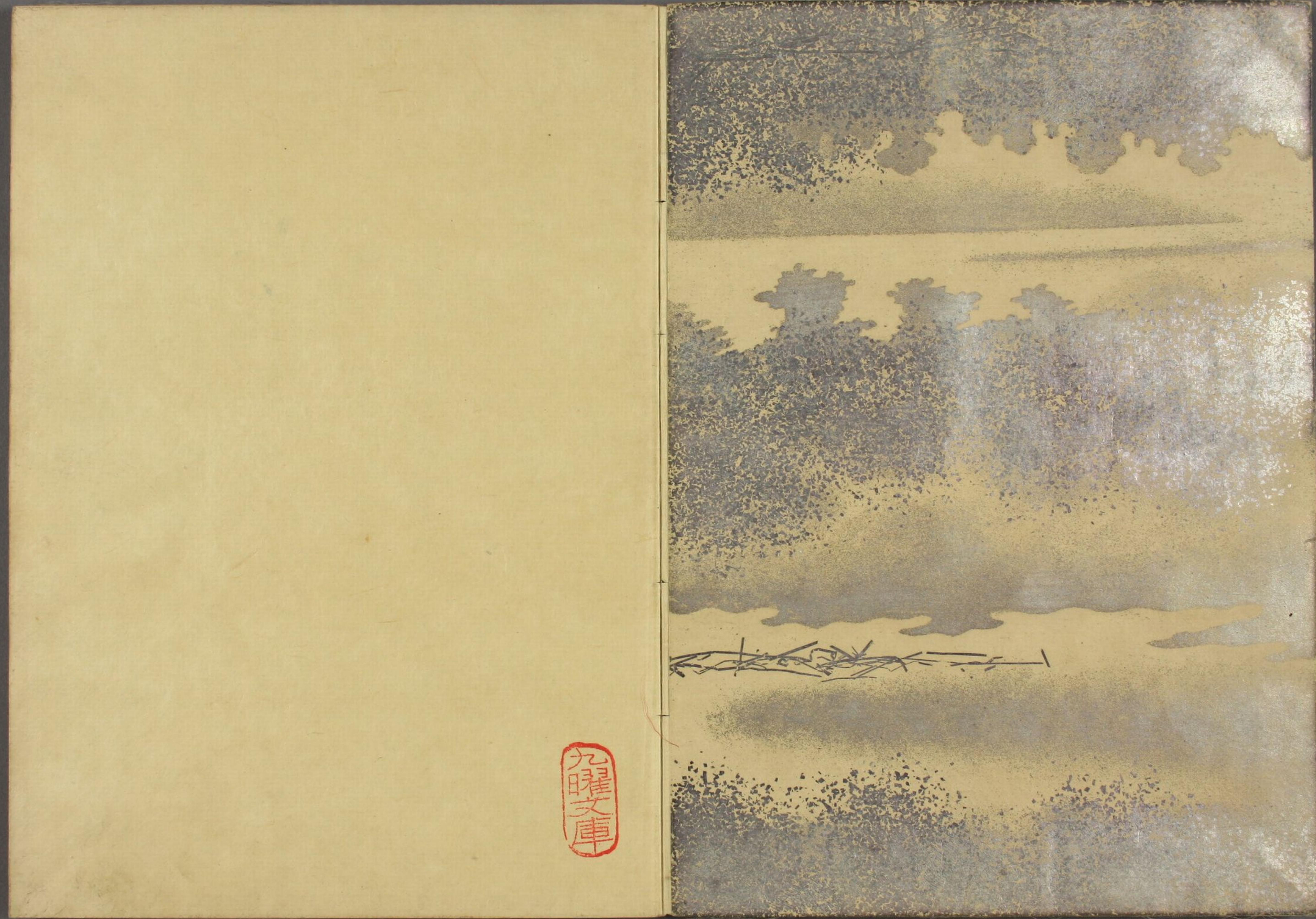


毛子貞詩集



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100





花鳥餘情第廿七

宇治

早蕨

寄生

早蕨

宇治四

秋と詞ととりく春の名とす組うす

よ蕨羽ぬだらひといとあり、ほふか

一歳の事わざ

もとゑどりく

秋玉篠下まのねみあうすあくともし

所上のる下れぬたりひ、とす半

なれ

よそあまきくいづれとよしむかひ

邦中多々人をうながす事は未だ  
ちよがいをもつてゐるなり事  
洛櫻ちよがい日向今うへ四時とまづり  
と案ののみ人中ひよそすとなり  
とせんとせん

人の多くそり神をもつりうりうり  
參般身も厚の年も歎きう今く今く  
よせのうりうりもううりうりよせ  
くうくうきり

よせのうりうりもううりうりよせ

むろむろいゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
むろむろむろむろむろむろむろ  
むろむろいあにや人つよりよりのより  
のよりむろむろむろむろむろむろ  
むろいよせのよせのよせのよせのよせ  
のよせのよせのよせのよせのよせのよせ  
のよせのよせのよせのよせのよせのよせ  
のよせのよせのよせのよせのよせのよせ

古文  
うつせんをすまし原や傳承のあまき  
と案字のあまきわざん事といえ

とくじあるととつり

あり、ま、まくそ、あらわし病く  
あり、と、よのほの、ももみうるの  
りとようり、倭波寒の、やまとひの京  
乃あやけうーとつと

ゆゆもむりあすかれらきとたまふ  
みうおもあき、うららく  
ゆゆもむりあすかれらきとたまふ

ちねりくす、三す日こみうおもあきと  
もね服のすとつうつも深服のす  
河もくもくとくの、すくわづりと

とくさせて、う

もくや庭の、まくらに、まのひとくが、まくらに、  
おのわら、服のすと、つうがのひと  
く、深服のす

わくめく

あやうり、金、あとそのま

ゆせぬ、あらう、あらう、て、うりぬ  
いりぬ

中のえで、まくらへ、まくらへ、まくらへ  
りと、まくらへ、まくらへ、まくらへ

かよひとらううま車とひえ  
よやあうほとつまくいのひひえ

じゆきとまちへゆかわうはといふす

ひいすきこ

かくとじゆとがくとくわくと

本草集

花のあはまとまくもとくのくとまく

ひきやう洞のうさかはきけんとくしわれのま  
うきやう洞のうさかはきけんとくしわれのま

まのまくにづる半

波羅密の梵語を翻て到般岸

セイ

セイ

セイ

到般岸

カ成らきん波の川もともとよき波の川もせ

本草集

洞川のうりとがくとまくもとまくもとまく

れうのうりとがくとまくもとまくもとまくも

タ響のうりとまくもとまくもとまくもとまくも

カキ

めうき、風のうりとまくもとまくもとまくも

本草集

清氣原のうりとまくもとまくもとまくもとまくも

本草集

今葉下の羽よやとまくもとまくもとまくもとまくも

本草集

今葉下の羽よやとまくもとまくもとまくもとまくも

治ゆるもとまくも

寢生 ヤドリキ  
宇治立

西より木の枝ミヤニより利羽ハ、峰山アマヤや  
うきよつての處トコとあらゆり木ヒ  
木のりやとつるゆくさうり葉ササギ青シオと  
あり葉ハスの木ヒよとと又楓樹ヤマガもと  
すつとやわまくは木ヒりくわ  
とみうれしもとうてそくぬよりや  
と木ヒりあくまくわりサ一葉ハタチのえ  
よりサニ國クニの妻メテの半ハ利二月  
ト立タチルミ任カヌ大カミ物モノを

手前

皆あらあつりきこゆのねりとて私の席  
にあんれいきもまく東えどきこし  
は人うきだりあつて

竹のむよタ音右ちたててよ鶴の  
うそをうけたれりてりてりて  
行つて石工とどきの人にとみて  
すゑあひのちつやう女郎たかの勝利大  
えきの又とえめり今よわうかの  
下よ位づきだ東えどかまく

あれあらだりまちうてこうなれや  
の女郎はまえの郎時あひてうけくさニ  
れえとくまうりサニのまうりうるの  
まうりまうりかく  
紳士のまうりひそりあは  
物をもとて財を有す白鳥はまくまく  
ゑつひそやあそとくらふ

朱雀院の女とえとう雀院ゆづり  
まわそもわがとくを有すなが  
ゆくわくやかくすもわくわく

おもてのまへりをかねておのづかのまへ  
海にうらわしきつゝはとみゆゑと  
スノコ思ひよ

あつそひのまへのまへんうりや  
アヒル人をもうりも  
朱雀院のゆえとすゑ院のゆえ  
のほしのまへに今上ノサニ代  
主と御中納言わきまく  
りそよがり

御こゑをゆ

御門を二所あるれどもなつて御  
まのまのけりりり暮をにまふ

ノリ

まよ殿上よもしをたまふ所  
ほどの仰みよつきのゆめ中納言ゆゑん  
あとまゆめ

さんけい仰みと中納言ゆゑん  
のゆゑゆめ中納言ゆゑん  
仰前をふくすゆめうの官能  
ものと養ふゆ

あういかくしままきこくにくはつまふ  
もとほけめ日体をくちにすれん  
ようえまく

女ニミハ母女山の日わりうるを  
のゆきすすまぐくにあそぶゆれ  
幕とてあらうす  
送春唯有酒 銷日不過暮云  
文集十六云

此詩久かどありゆづつ日くくこ  
きなくしてまくすとア  
したのゆくありゆくれとある  
とくも

アリヤヒ奉うりゆ山門の山暮りぬ  
あるせゆくよゆかとゆくよゆつん  
とありうる御事へきゆくわくれ  
ゆく

あけた一もとむすびのゆくす  
ひ

アリヤヒ朝 論詠云  
因得園中花養魏清右評新一枝春

あああをいわせのまうれのうじあわせとまく

近喜集

時あつまむ望のたまむと病の難よすえむ  
苦しうそせとてまうなうれと縁のあわせとてま

今來女ニえうめいじけよとくらうす半  
と下のうじよせまつこ

ひりくせんきの年ととととと

とくづ

中のまどわゆるの秋うやとの年と

をもととととととととと

右左右ねやのきつとく六のまどりとくこの

君ゆこそ

タまう行の巻よ左右よおと右左下

あやまうや近喜堂女郎のえひち

にまゆりよりてゑくらむとく右大

はとづや

あきうゆく思ふうんともなる成しき  
きくまうくまうん

水りうきーきー水波不通とくや文や

角の墨巻とくとくに町あやとく

きくまうくまうんともなる成しき

をひよそんのたまひ水りぬゆく  
かゆらひうもこのまへかゆくい  
ゆ也

せしゆかづきのゆくらあうこれたる  
ゑうやく

タ雪クモキノカリのゆくら雪井のと落葉ふふ  
たもゆもそうほづま

はあうちの太納アシカのうふくとくをなむ  
おれに

梅峯大納アセチ女アセチ中君奉アラダイ紅梅卷アラダイ

せうとくやまとと小りゆめうて始  
人アセチ梅峯大納アセチテアセチこの時太大  
臣アセチあれも梅峯大納アセチといふ  
阿アセチ居アセチえいやまと思けに  
アリよりてりとの音アラタけりにわ語アラタ  
作との初アラタ

風アラタあらかずもう山アラタのまう思  
うん

ニ東風アラタアレアラタもう山アラタのまう思  
うらうりうとあとぬゆうとつあううし

うきと山里アノ人今

ちりもーとのゆえ

まくはねけんわく

草てよきのとみとあに  
い此祠にうつたのもとあり  
あどもひそむれせり

お詫言りあひまくまく

あひぢやがやくわくわく

りきめり

おしきとく祠もはれのものとわ

まえの巻の下祠もうへく祐らを

てとありうきさきふよこてよみ  
く、将家も匂えとくへやはまくつ

かづまとくあくまのもの

るく

あくまくはねあくせりもく

うく

様サガほひまくあきわくあくまくそあく

外郎たとみまくそそそそ

參

女郎ましとひうどをひきる男よりそぞりとさる  
今葉あくわのくわがれつうとて取船えり  
かくしきくくとてりてあそひゆふとせ  
らまはあー水元の名うけしまうなる  
アシムとみ行つまうく

わくまへきだよすれ

ちくまの連や

わくま

トヨミタモミトモヒトモアモ通トヨミタモミトモヒトモアモ通

あくかくとくのじて河づ

お高よねの風の音すアラマツ  
トキナヒギの風アラマツトモヒヤアトモ  
カの音リナムアラマツトモヒヤアトモ  
アラマツアラスアラマツトモヒヤアトモ  
アラマツアラスアラマツトモヒヤアトモ  
アラマツアラスアラマツトモヒヤアトモ  
見のてり

おれの身のうち二三年ばかりうきよ  
せばうしよぬアラマツトモヒヤアトモ  
ヨの身のひをうんざく

水原とせとよじきあらりの院へす大

きるをもかを不爲

河海と六条院道せしむ事し御ゆ

タリ嵯峨院、桂院、栖寂寺と

今棄處院と六条院と御院うせぬ

めは二三年ばかりのとてせとよじき

いとくわんと六条院とよじけ

人のよけへあそへとての御りつ

京とも間とりよどゆとてゐる大

ねりうづのすとてゐる人のよけと

故院へしきの上りもすれ候

の花よ

月

の花よ院君一月とよじきの花

の花よ頬紅一月とよじきの花

の花よ水原抄かくとよじきの花

の花よ水原抄かくとよじきの花

の花よ水原抄かくとよじきの花

の花よ水原抄かくとよじきの花

の花よ水原抄かくとよじきの花

の花よ水原抄かくとよじきの花

國史よりせり。貞觀十八年。清和  
太后公家より奉り。御くす。よもんし。  
大覺寺と名づけり。ゆり。嵯峨天皇  
昇殿のうち。浴庭不被塗。樹亦壊。とい  
ひ。事。國史より。嵯峨天皇の  
嵯峨院。世は。まじ。け。事。と  
アラ。六衆院の御事。よじ。ゆり。  
ト。アラ。ひ。み。ゆ。あ。人。すん  
玉乃山。わざわざ。人。み。と。金。あ。人。すん  
え。より。お花。を。多く。の。ら。六衆院。  
の。う。ゆ。今。事。セ

ワタシ。く。き。ア。め。か。う。か。ん  
ミ。シ。ミ。ア。の。無。禁。ノ。一。も。又。宣。ま。と。忌。ま  
草。と。ソ。ア。つ。そ。ヨ。ソ。シ。モ。ト。モ。リ。モ  
ア。ソ。リ。生。と。相。遠。き。モ  
ガ。の。ツ。ア。ア。ウ。シ。モ。ヒ。モ。ケ。ナ。モ  
ケ。ナ。モ。リ。モ  
六。衆。院。セ。ア。時。ア。リ。ち。ね。ハ。い。モ  
リ。リ。ア。モ。ヒ。モ。の。本。モ  
レ。サ。日。ア。モ。リ。の。ワ。モ。

かえの浦 志日とよひ

アラタニシトコトハ  
アラタニシトコトハ

の文

大室の日向の御  
つゝわとまのまくらまくら

かくのうちより多くある（玉藻）

二年後より能く  
余の事に  
中のをあつて  
行つたる

卷之三

之物の多くは  
舊物

御門水もれやあみのれそとゆ

をあはれぬまゝとおも  
ひよしむわく山にすのうて

和  
之  
中  
一  
人

後悔遺  
月之餘  
猶可也  
事之無  
不以爲  
善之無  
不以爲  
美之無  
不以爲  
德之無  
不以爲  
能之無  
不以爲  
知之無  
不以爲  
行之無  
不以爲

今案我をして山乃國御大和御宿より  
くちづけゆき候ととしまして山の月す  
みのりとつまむ下げる  
この角りをうなづくとつまと  
そとよどはすとまくわかの都、あれ  
とつやまとと山の月す  
うとうや又中身の匂えりとくられ  
ゆうゆね山のあくびてく  
椎の葉れどもりとくらでだる

三井の毛の山のうと思ひ

松の葉れどもりとくらでだる  
冬あくびてくらでだる首もあはの林のまへ  
おもく

あくびてくらでだる今もりけり

おりやうまのせむわへ人りよもりけり  
うのや

白えの位をとりつまむ事もわへ  
やゑと石すとてたくらんとよ  
まへ

あまたのうやじまゆもとくわりへど

舊

わらんよのとくもとくもももとくわ

今棄後朝コウテイのとくほア禄ロクの事モノ

とくまく

まつつのえりてふうりとくゆき

六月サツヨリのカツカツの腰ヒダすくは

葉ハ

けくらはくはくはくに

れいのとく

かくとくけりとくとくとく

約アコ

西あもせとくせとく

わもせハ食シわとく傳ハシ胡コの餃エとく

わらもとくとく今ハシよりとくゆアとく

せとくとく

まくひくまくきばりとくとくとく

匂ハシえ嫁ハジ娶ハシのほ三ミ月ツキのとく

立タケ立タケ人ヒト三ミきミねネまマれメ

李リ都ドウ天テン曆リ天テン曆リ二ニ年ニ十一イ月ツキ廿二ニ日ヒ丁ヂ卯ヲ

夜詣右兼相坊門家娶公中女廿四日夜  
更衝深向右相府亭所住之東南對廂東  
以西向設座以朱臺六基及銀黑弁饌サ  
臺一双以様器弁饌菓等安座右其西頭  
南北冠設客座主公傳侍女告備饌由司印  
出就座丸弁未簪師平マ右馬門簪師氏  
朝臣相次加座以折敷設饌丸少將藤原  
朝臣伊平以盞酒安臺酒巡兩三行而入  
簾中侍女以一盞餅安筥蓋差定主公序  
客鄉起就別處余欽深賜陪從者祿立位  
位四人各同細長二領無官三人白絹各一  
疋召綰以下錢二万

今案女裝束、常之唐衣木之細長、  
貴女志之有也故引別よしれとそゆつて  
三重かゝりの唐衣、中倍ありとつゝや  
脣、小腰引腰也或白或地褶或村濃木  
有差異也

物つゝと稱りゆとの中アリ

西宮御院雜事中御隨身勤夜行召

ツキソラストキフ  
継養時

今案親王家又有召健式部つ重明親王  
嫁娶時召純以下歲二万と祿より  
上乃祀よりより勅事もぞれり  
もすゆり又知足院禪圓院の猶  
みく召健と異セ事もわざせ  
祈りと申所舍人うふ

君ノノマテモトナタうけすわきる

うかねアタシく今來のまづりをつよれ  
りひきまえ

ゆくらどうみとせき川の下のしゆめりもの  
あくも人みす室川のあくわむとそ思ふ  
え良記主

アリ

アリ

アリ

阿木村のあみのまづりをうまくす

アリ

六条院のあみのまづりをうまくす  
アリ

かう印のあみのまづりをうまくす

うりの故郷もとつてしゆるをめよ我まく  
此處と中の者つひえりきゆく  
百へむてあらうるゑ

伊

おえり仰忌日よきやうけりのま

うりらゆきとおとこり  
あとくこれと中志のゆくとさう  
うきとくわくのふううとの  
乃行つまの人志仰ぬきわく  
きふくとくわくのまく

のとせ

一日うけくまくうくうくう

まくわくわくわく山里とたくとたく

もなり

あらやまのひくようぐれりとまよもあり  
あらうれきにまみまくとまんと

わらやのまよひあらやのまよ  
まよひてもよひめとまよのまよのまよ

まよひわざくとちあらうたうかし

てゆくやくひきこもつりんらうも  
あけくらむどりくいきくみの  
もううりゆく

住くらむとわりつるこーのもうく小  
懐妊クライニのアラムの节ヨコの年ヲく  
歌カバをささげか

人ハシ事ハシの歌ハシをよつとしもうとあきせりゆく  
今來 中志ミハシのめメ六君ロククンもうまよひモウマヨヒ  
まわりうつまりりりひきよみてもしも  
ひきぬまづきす

みまきわすれとおのとおもひやがけつるまうん  
みうれしのめりうれしきくつりもくく  
みうれしのめりうれしきくつりもくく  
ちうきふうもくし

うへくらむあきせり

ちうき拂ハラフくらむあきせり

御厨ミツジ小唐櫻カラヒラ

うへくらむあきせり

ひきぬまづきす

そやかとあうけうきあ

とつりよんじやうとまくわうめ  
とあくなしゆうとまくわうめ  
あらのまくわうせう

タマリの事

ひよしのまゝに  
事ともありゆゑ

# 新参の入門

かくの如きとお居の傍より

蒙古文

し  
は  
ま  
た  
か  
く  
そ  
れ  
の  
よ  
う  
と  
う  
な  
の  
せ  
ん  
じ  
ん

おとづれのあらわし

ニ事役の邊の御事と申す事の御事

きこ

をもかね里

紀伊國の古所アヤシ川アヤシても引  
えまそもも川アヤシらもも川アヤシらもも  
ひしわやゆ人アヤシももとのれづよつも  
田原川アヤシのへまと思アヤシせんもこれに  
うそうき事アヤシももきもとアヤシ思アヤシうほて  
くわくわく行アヤシるの様アヤシて  
ちもせりたよせらむにアヤシりも行アヤシりもと

水底スイももものあくべ母アヤシももとさりもと

もううとくもよあられわかとひりりひと  
ふまことうり或流アヤシももとのあくべもと

人のほくべりとあらへ思アヤシもとさり  
まとも

とおれゑの事アヤシとひりと人アヤシも  
りゆそよとうりの人のもいよがよ  
ひいれもうのううりつひなうと

まくらのうはりじつまよとあ  
きよとのまへ思ひゆへ  
あまくらとあまくら  
うかまくらとあまくら故娘もり  
うかまくらとあまくら故娘もり  
うかまくらとあまくら故娘もり  
うかまくらとあまくら故娘もり  
うかまくらとあまくら故娘もり  
うかまくらとあまくら故娘もり

故娘君と一版ともお見合にかひひ  
ふくわうけ

まくらとまくらとまくら

うかのゆうやまくらとまくら

故宮の落胤股のゆうゆう

伊豆のゆうゆうゆうゆう

き落胤とまく

佛よりんとまくまくまくまく

うかのゆうゆうゆうゆうゆうゆう

火んとまくまく

練と調練とまく

さうりのまへあら神

母君のまとみよとひ

今アラそわいめどもやとく

故母君のまと思ふもあら

もうまくあらもの

こうしのまやまとよみ

めむかとくきのとく

木クモ蜘蛛クモよつまゆ虫ムカシ

おほの物モノとてとけこまのく

奉

様タモトのまよの神ミコトなまき神ミコトよなまわ神ミコトよ

まよひとみゆくの申マサニとうえり

あよゆきとよそよみてわよとみうめと

とてつりあめうたとく

ソウル一ソウルとくわんクワンアメノヒメアメノヒメとく

うひく

まのうみウミ中のまくまよひよ

御ミツとくまくまよひよ

まくまよひよ

「そぞろよこ

其の半納とぞじうり

け中納と謂誰人ト一尋之

ひまのくましき師と志のうてよとくまと  
伊那海の律の音へ監房調も伴也 平調  
リラキラ色いろりや野曲の家とも

ウテ

わざてたるのくわう清

祥賀と引あぐハミ人有清ト  
モくすて答祥揖襄の作はるもや

はう新太助とのお贺ニ奈波(ありぬ)

ま 束帯をうき三つより名アツミ  
正衣下鞆と着物アリテシヨリ

ウテ

金くわくさうく清あくアのふトウトウ

ウテ

西宮折大將初任事除目畢大臣以下着  
議所座大將暫當折射場殿令奏度拜  
ス此間で奏渡南階前退也之間近來ホ  
仕庭除忽無敷物等撤篇放テ時率公

御及次將以下、従敷政門向里並坐。内  
以上垣下公卿各着座。上卿着外座  
次將在内先近  
傍以下六位官人於庭前、左並着庭中  
座次公从及中少將木座立札相次立札  
食床於庭中給六位以下看物盒、右酒等  
之後被物絹木各有着。但新任大將若在  
里茅者、左可到其家欣賄、右勝方饗食准是  
可知。此日以親王爲垣下益故宴耳。勘物  
云大將上鷹不來。有親王大約着中將上  
今案ある初任の時、左之にて中將に  
あゆも。

之の御すらうへゆらう  
垣下の馬とづて、左請伴とおと垣  
下とまつり、いもくつますからんとおね  
より上首の三卿、左じいりや、親王じ  
ふうの時ちねりつまふりつますわく匂  
えし垣下の庭月桂ヤシムカ也

河源よ取毛もあらへ倒れぬつまうある  
あらわやまくすえ垣下といふて  
老とひづる。

ラクキタケくろとのせじとくわまと

李部王記天曆二年七月七日是夕故女  
沛有產養奉產婦饌衡重十六谷破子食  
七荷毛食八具基奉手錢二万贈物兒衣襍  
祫各五重納支佗木右口二合有白使大  
家善友原守忠傳言云物雖鄙陋今宮所  
贈蓋可有之意報之恩同備至恐喜為深况

羨宮恩命竹恐元極印纏頭白細長一重  
榜一具守忠令造門追侍報賜祫

ちりんひづくふと

李部王死木よみき

まれりまくせんのむきゆきとくとく  
てかくアツセカム

粉製の五穀と又毛よみてて粉ナ  
く餅よみてゆて甘苦ととぞとも

あらわすりき竹の筒とてこ中より  
そくそくつくるもくとつまうてまくと

姿双六乃調度のとくまゐて

うがわ死日ひのときのむかへりもくらつ  
の節さあおみゆつせぬるようちつ

きてふとくもひる

御うとくじうなう人ひしもつてもねはう  
きくくこりのゆきりに人のやうりしつとけ  
つそせほくにしきあくやあくとん

嵯峨皇女梨姫

通忠仁公

宇多皇女源朝臣

傾子通貞信公

醍醐皇女勳子内親王

同皇女康子内親王共配右大臣師輔公

同皇女清子内親王配大納言畠原師氏生一  
女子詔子内親王配大納言源清蔭卿後配  
河内守橘惟風 村上皇女保子内親王配  
貞信公 感子内親王配右大臣顯光公  
今棄ける例づ以脱屣のう或ハ崩山の  
ちゆ人のうより行ゆ西うと左位の天子  
のゆ女臣下よ配しゆすもんじゆく嵯峨の  
皇女栗姫のゆすもんじゆく嵯峨の漢朝よ  
ハ其例すわらもんじゆく尚もとよそ

我はしてゆゑあわとひづくや

えりび名寄のゆきの一葉のえはすとの  
ぬく一葉あまきとあくとくとく思ひて  
まわる君君いゝ小ちうりかの日うらうと  
子誕生のちみ年平日とじよと一百日をも  
りうとううの日仏式ううて併くもふ  
うううれ

あくやしく承うけてまひいふすとよとし  
すれ

四月一日よりせらうと

四月の音よつとれとれと三葉あまくと  
くよつとすと  
ゆうつよととせめじてなうれむえん  
せませ待ふ

西宮記云天曆三年四月十二日於飞香  
舍有藤花宣以殿上仰倚子立南廂有珠  
南廂東一二三間卷簾前立四天屏  
风三帖同廂西中戸東面東一间障ふ而  
面立丸尺屏风ニ帖敷信濃廣庭中敷  
代主印倚み南簷敷同造門簷み中间

以東敷童公鄉座當庭中。戶南立尺章  
子其西在沛酒具赤深火爐一口有黑漆  
臺同机二前其上在滿心瓶金昨金銅杪  
件鳥入沛酒銀御鉢又一口加土器臺盤  
炭取當公鄉南前庭敷紫端疊四枚其南  
敷二枚殿上人座仰掃部寮令敷軒廊東  
小庭疊二行西面北上樂所座末刻御  
召右大臣次諸卿參上次侍臣着一座五位  
小六供肺膳具註維時朝臣卒立位上位  
位南供肺膳具註維時朝臣卒立位上位  
自南庭渡西肆置物沛机二碁立位座西  
橡木作在木蘭地綺敷物卧組木內折敷  
四枚立沛机上淺香折敷沉裏以金闕之  
朽葉色唐羅花文綾敷在心葉布花用組  
木件組折敷一各四加象牙臺表紫檀裏  
蘋芳在銀筋供膳折敷二枚以銀作士器一  
四種生物丁物霍坏以銀作士器一鑿  
供了陪膳退下給臣下衝童供沛酒銀蓋  
維時朝臣供之仔手取鉢又給臣下一鉢給  
二獻餽飪給臣下大臣奏聞召樂所別當  
中納言源朝廷有令召禾人別當仰給人

召之未所余入奏調子有奇事立文臺立

置物沛机置内硯紙給臣下獻一題維時大

臣奏准延長例地下人一兩獻奇召庭燎

月光一獻秋伊平取文臺右兵部化清正

明セテ講之允少將朝成歲人以稚信朝臣秉燭

地下獻者源順友原薰家淮木有時時方木玉に講之木臣取内製召公卿侍臣

堪者奏絲竹大臣納言渡西大臣取沛

杜源朝臣取沛琴譜進山前奏云巡喜沛

時山琴音云深羽臣木稱物名授頭參人

置内机琴も袋彈沛薰家伎聽昇殿大臣  
賜祿納言女裝原氏小註や大臣給沛衣  
一襲又以好裝給之

みかみりいのとあけて沛ソソトドリ

天暦三年記入山前

石舟のわせらる大師も

天暦三年右大臣師浦公為公卿上首

みかみりゆくれの花のとてり殿上人のまより

天暦三年南殿藤花下賜近臣座

かくの今て

天暦三年軒廊東設樂所座

故六条院のにてにうちきゆく入るのまゝへて  
あさせ御さんとのぬ二毫みえのねりつま  
うとねりうきつまくらむつまくらむつまくら

乃ゆといわ型とくとくわんのりめとくや

天暦三年右大臣捧先皇賜勅内親王筆  
譜三卷左大臣猪執赤笛一面管元貞保親王  
た兵備督將螺筆一面均有音奏若而獻之  
今案天暦三年の有つやの女御宗みづ九條  
右丞相へぬじとう延長節つの白女勅内

御主はもソウハ系歴の主はもうかうこ  
きよひりて延長節つの勅内親王にたま  
う樂絃の革邊とてもうかうこまこと  
のわうりり六条院の女御宗みづ九條  
絃琴の音りくもくせうりぬあ猪竹  
ももでます

ぬえいねえよほくつすのくみのと

つまくら左臣筆の筆

あひ御さんとくアツセアアランア  
きよそんのぬりあああらしのらし

きよわりえくらひのひやきゆりも  
ひそつをあつへんゆりや

天曆三年 沈香折敷四枚紫檀臺盆器  
銀器供御看粉粧大有赤漆火爐銀鉢  
寛治立年万壽元年天盃用瑞瑞御盃

あくはあくしていふあく

ク音のひるの上首りあまのと盃と  
火爐アムリてみじい位次とくうり  
て天盃とあくとあく

あくすくうきうきとあん御内引きうけく  
ととのひくこげひとくとく

賜天盃例

天曆七年十月廿八日菊合式詣御親王童

明賜天盃

寛和四年四月廿七日密宴中務卿具平親

王賜天盃 賜親王例

永延二年三月廿五日擣政内室宇多給天盃

永祚元年二月十六日朝親行幸内室召賜天盃

寛弘三年三月四日行幸御堂殿奉時給天盃

同カニ年十二月廿日後一条院御百日御堂殿  
給天盃 以上給執政例也

今案此後万壽元年寧治殿嘉保三年  
京極殿賜上皇御盃寬永三年光明峯  
寺移改 永徳元年室町界行幸麻原院

大相國木給之也

為後學以次書之

をとす事の致みあして來也  
事より事へて事へて事へて事へて  
せよもんとてよもんとせよもんと  
と孔門の格言而遂に至るもくもく

乞おまき下りて承延二年三月

サ廿日小右記云移改卒貢も左大臣起  
座破御盃右大臣取御地より上給御  
立於移改け乃被作壽言或者云万國移  
改入有答奏らし一易往移改みト參拜有  
うやうの例もありとてつて從之  
りつまゆすとくりやあくんとく  
天主とくに時ひち爲とくて口内づみ  
けとくのじやうのうそく

とまくらにとおもひてひらひの湯  
わくらあ御前よじひとすぬてお  
ようけうれしむるは作法

ありぬかがりはのまよるまのうき  
橋達集 遠志歸時有量のめの花のまき  
をゆきよ殿上のひづとわうつうまけ

アケリ  
翁人友原奉

あひたれのまきのまをあまくら  
もいやさしくんぐらむわりど

くらうじてあひくらうと  
こねうりて女へ車をうづく時を打  
板とつわきて車のまくらでえんと  
とす物

まくらのまくら

すわくらとくらむのまくらのまくら  
毛や

かづくらせうけりやううかて

井の尼志のまくらとくらむのまくら  
あくまうにうみくら

花是館情才女へ

宇治

東屋

東屋

宇治六

詞と歌と歌りと筆の歌と判りうる女  
二家の物や

瓶吸ふとよりみどりき御ひわけらかくも  
アのうきうき

山はそよ風國よりあらわすやう君と  
常陸前司のうじとよしとそれへりる大  
ねのうじとよしとよしの奉りまつるあく  
みうき

みのまももあくびりにまうとーあとわよ  
だり

常陸前司の者人或は御子が御守事役  
役守事以上前役

よあとやうゆめりてまんじうつ

／あくびり

よそて居るゆゑのまくとゆひれ  
まくとゆひれ

全

かろんゆく

庚申經云人脈中有三尸爲人太官庚申之  
夜上告天帝記人品過絕人生籍庚申之  
夜不寢則不得上天 許渾詩

年長每方推甲子夜寒初共守度申

あけくも

内臓坊の太のせりつりわひを

示人辨外そのものあひ

うちわももいひみうの

やひの件物や語りうる魏うるん

うるん

うるまくとく行のゆゑにあひたまうよ  
ゆの御ミタマ舟のきのまうり  
媒ミツメのいりとみの御ミタマわ  
ゆとそ

失のまうり

かみのまこと

家のゆミタマ年セミタマてうのまうり  
ノ經ケイ廻タマま

まくしマクシあそひアソヒねネまます  
あそひアソヒやヤまくとトまく

まく海マクシのゆミタマやヤまくしと

疏ロ病ヨウやマすマのゆミタマのじジる

いとまよイトマヨくちクチりリやヤかくし  
もモづけ

これ見ミらラのうウたまタマとトあアがガまマ  
とトあアまマけケてテかカねネまマすスりリ  
やヤ下アくクくクくクくク

みこのじシとトこくクをヲおオきキらラわ

より用ひるふゆく事ありて

うろこ

御うとくあつづみじとうそくもくらゑ

國史ニ三位源朝臣寮姫君嵯峨太上  
天皇之女ニ母富麻氏天皇邊寧未ね甚  
人太政大臣ニ一位在原御内思仁  
時天皇悅其風操起倫殊勅嫁之清和  
太后其長女ニ繫非性行至正

可賞觀

すうわうわうわうまうわうと

東總見善相公意見

うりや萬承吉

あつアキルニヰのすうりうう又使  
あらうき乃ふとくすうりうつまむ一  
こくはぬあまのやーと、

け跡もとまよととみづきなれ

111

城をかのじとまよととみづきなれ  
ニ宇治のえりか方中をのうい申候  
わくえ中をとくのういなし

蒙古文

中の志乃の事也

あてまといの  
人

伊勢守の朝

ホクナセラ  
ノ今 二四セニロ

ホクナニセラ  
ノ今 ノロセ モロニ ハ タニセ イメリトハ ニヨニ エ  
山 沙 穂 外 情 化 木 任 意 不 常 之 駆 テ 近 朱  
ニシヤラミ タイケニテシヤウモズミサニタナヨリトノイハ  
次 将 章 叙 上 級 主 努 仍 留 徒 时 别 为 寄 や  
モキノキル ニヨハ  
村 上 自 錄 不 纏 村 上

蜻蛉日記  
馬込もよしもと

もそれがあれあいとあつたるのあまこと

一  
人  
之  
生  
死

トのまゝに、

蒙古文

アフニク  
奥引えられと  
アフニク

かのやうのありぬけりあらわにとくち下  
あわする

史記の書よりうとうかゆやりすまは

よそ

かのゆをやしりみだとせき歌そめりまは

みうみじの風とやしりみだとせき歌そめりまは  
ス人まとまつてせじゆうの風とおねえ  
のうへゆきてわたりうつとみてまう  
ひとむじゆきて

そやそりりりもゆひもゆひくは  
りのよそのやまつむとひを中元  
の佛とくらんゆづまゆゆりあれ奉  
りあらまへ

井よもせこくや

あらまよもせこくやまよもせこくや  
ゆくよもせこくやまよもせこくや  
ゆくよもせこくやまよもせこくや

ものわくよもせこくやまよもせこくや  
なよもせこくやまよもせこくや

（「中ノ事で我のうりりけんわ  
んと思ひ乍とりあつてはま  
もそわし人ならま

天川とるくとむとりの先とく行  
つ京をさう

あすまきう奉ひ匂えのまと度量にた  
とくさりあらはんとわくすとい  
りの先とソア上の初りにたまくま  
つてそやうよみととづかよほんも  
よつづく（未と中わのまのや）未

えいとさきあらん

（トウボク）  
（トウボク）

（トウボク）

權記行ぬ長袖ヨイヒヤニシテハヤヒ  
牛頭栴檀木

（トウボク）

往々實語者不詭語者

（トウボク）

冬

ソヨリヒトの申じにまへ世のまゝは見えり

あらとあらとわざのこもりゆき

おと夜あらと夜のとよもせとうけふ

涼ゆきのやまうき

ゆすり沐浴ミクヨクする

九十日ハシマツて

十月ヒサツの日ヒにて

乃行ハシマツて

身ヒメれつて

望ヒツカタとて

不動ハドラニのやうヒコ急怒ヒヤウ相ヒタチあつた

れど

日ヒ殿ヒシキよしめくヒシキひ揚ヒタツけ

常ヒタチ度ヒタチのま

うつしよとひきとて

彩ヒツキの鞍ヒツカもく馬

役ヒツカタへりてしとなりつんと

是ヒツカタなねがす

力ヒツカタあれとありにまもと

さきと不放擇サシラフミ

おもてまくらあくこゝ

おそまへんとしよ

かづきのわくとあそんもうた物カツクタモト

うそなうよあすとつまみ上鷹ジヤウラシ

じうひ

うらのゆくつらのゆきうらのとを

ゆくつらをきゆくも

乃くめりてからんとみる所思  
まじりとまじゆる事あきらめとまじら  
にまじりてのまじゆる事  
まじやうすまじゆる事のわざとまじら  
まじやうすまじゆる事のわざとまじら  
と母志のまじゆる事わざとまじら

ノイニ思ひ  
ゆくまじゆる事  
みまわねのみまわね  
なつまじゆ

はあまくうてひそむうきしとまじゆ  
アムンとまじゆと思ふ

常法のありやかでひそむうき  
えとまのふとまじゆとまじゆ  
うきとまじゆとまじゆとまじゆ

独り

アムクマハアムクマハ  
アムクマハアムクマハ

けやゆア宮の母志とあります  
とつも

ねものあまくすくとけう

二事はそぞらのあまくすくとけうと

ううとことか事

えちゆくはぬきゆめよみうひゆ病よううくも  
ぬまくねあとつうが将よくくも  
もとむらのむけのむくむくも  
くまとくまかのむくのむくむくも  
母のゆねれゑのようく

あやくあらわの声

うきまのくま

もきみりやとわくわくとくまく  
くまく

くまく

いぬまやと庵ア宿ヤ但ヤ石ノテスエ  
ぬま 今棄宿のまうに二事も  
アの母もとくのやうとつて  
こりうみのまのまくわく(まくわく)の  
まくわく(まくわく)のまくわく(まくわく)

ゆくつを

むあまくすくとけうとくまくまく  
せすよあまくすくとくまくまく

主ひしるうとせやあらの西やうせん  
をもとあるとてもあらりうとすうとも

母の中わのえりよろく

みゆくとけいとくらをさきよく

故宮のひづまへ寝殿とつりあ

すもうとふ半

あゆきにまくらゆ

三索とくわゆ

ひのひつとめりすいとく

もやあしけ

柳すくは僧ふま渓あく山ゆつの

ふねりつりと十二年山とそそぐれ

ちきつてみりじうの苦行とゆゑと因縁

よ十禪師ノ補

すれその半とど

りや

後撰

人多す本をやむ

人多すとてうれとくの爲と見ゆすむ

よたうのそよと

青表紙え未勘

トサ

太白日記え未見

うれむりくわゆ。わくらを

寧  
少  
人  
セ  
ト  
ホ  
ミ  
ツ

行  
止

うちも内裏やわらかうらのや  
あらうとやうと金

はな二事の中  
八毛のすせ

蒙古文

おののこをうりきらでそな

飛彈の工番近の恐る

わざわざうかとて

ひまのとおりふとて

かづきまのまみゆかひまくわら

詔書の流れと車のひりどアも

車の中よねるとつれすとや

かぎとくちるあつやすくの車

うりとくとせんとくしゆうとく

まとわらりとくとくとくとく

まわらじ車あまめぬれ

ゆと画がよ了落一ゆりとく

りゆひのやうりとくとくとく

のくとくとくせ、つらとくとくとく

ちくとくとくとくとくとくとくとく

ひとよもきくすら和とくとくとく

たひひひまきとく

うとまわらのとく

はせす

貞信公達と一通の意

テイニミヨリ

モリ

サ

主<sup>ス</sup>い貞信<sup>テイシコウ</sup>乃<sup>ハ</sup>師<sup>シ</sup>檀<sup>タニ</sup>多<sup>タマ</sup>少<sup>シ</sup>下<sup>シ</sup>法性寺<sup>カクショウジ</sup>也<sup>カ</sup>  
若<sup>カ</sup>と<sup>ト</sup>そりと<sup>ト</sup>は<sup>ハ</sup>性<sup>セイ</sup>寺<sup>ジ</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>  
か<sup>カ</sup>京<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>に<sup>ニ</sup>前<sup>メイ</sup>アリ  
車<sup>カ</sup>や<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>所<sup>シ</sup>引<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>ナ<sup>ハ</sup>ナ<sup>ハ</sup>  
わ<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>と<sup>ト</sup>つ<sup>ハ</sup>山<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>  
転<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>う<sup>ト</sup>み<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>ま<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>胡<sup>ハ</sup>夢<sup>ハ</sup>の<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>神<sup>ハ</sup>  
故<sup>ハ</sup>水<sup>ハ</sup>多<sup>ハ</sup>の<sup>ト</sup>み<sup>ト</sup>恩<sup>ハ</sup>待<sup>ハ</sup>テ<sup>ト</sup>  
あ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>と<sup>ト</sup>ひ<sup>ハ</sup>あ<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>に<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>  
ゆ<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>そ<sup>ト</sup>わ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>と<sup>ト</sup>  
を<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>

みちのくの山

みちのあひへる處へ行かむ

其のやうとくのまゝに  
そよてふしゆくは  
かのうのまゝに  
とよひあし  
さんまへじよわゆ  
ひゆあまのう  
あらわすやのう

上の詞りもつゝあづまとてすまくやう  
トスミテテ取こす女こよの扇おうぎ、ほりとそ  
らきとす半はんと侍役しやくともとくとせ玉タマの  
翠みどりのふととのうとくとくとく  
三さんの若わかを首くびにすのむき、あせ顔おもてやの日ひ  
えれとまきの寒さむりうねりとす里さとの  
う宿しゆくとすとしに四よとくとく

